

## 座談会「新美先生の思い出」



●1975(昭和50)年10月25日

●於:安城市民会館

昭和50年秋から安城市立図書館の主催で新美南吉に親しむ講座が開かれた。その3回目に7人の教え子(安城高女19回生)による座談会が催され、それまで知られなかった教師時代の南吉を語って好評を博した。

司会	神谷素光		
	馬場貞	(後藤)	安城
	本城良子		安城
	鈴木秀子	(木村)	名古屋
	清彰子	(中川)	東京
	竹内孝子	(佐治)	半田
	尾藤さち	(杉浦)	半田
	加藤千津子	(山口)	安城

### —主催者挨拶—(図書館長)

**中野** ただ今から、新美南吉に親しむ講座第3回を、行いたいと思います。一時間半にわたりまして、新美先生の教え子の皆さんに、先生の思い出を語って頂きます。たくさんの教え子の方においで頂いて、本当に有り難いと思っております。皆さま方は、大変お忙しいなかを、遠く東京から、或いは名古屋、半田、そして地元安城から、わざわざお越し頂いたわけでございます。会場の後方の机の上に、新美先生が生徒に贈られた色紙や、手紙、その他、数々のゆかりの品々が並べてございます。後ほどごゆっくりとごらん下さいますように。

この講座の司会につきましては、神谷素光先生にお願いしてありますので、ここで司会のバトン  
を神谷先生にタッチいたします。

**神谷** それではただ今から、座談会を始めたいと思います。新美南吉先生が、教員として安城  
にお見えになりましたのが、昭和13年の4月であります。そして、昭和18年の2月まで、約5年  
弱という間、教師として、はた又、童話作家として、この安城の地に親しんで頂いたということ  
です。この講座の1回、2回につきましては、研究者、評論家という方にお話をして頂きましたが、  
今日は、実際に南吉先生のお姿を見、声に接し、身近に学校生活を共にして下さった教え子の皆  
さんに、集まって頂いて、お話を聞くことに致したわけでありませう。と、言いますのは、作品とか、  
日記とか、そういうものをお読み頂いて、それぞれの、南吉先生に対する感想なり評論なりとい  
うものが、随分たくさん出てくるようになりました。しかしながら、それらの人達の大部分が、ほと  
んど南吉先生に接したことの無い人、いつでも批判的に、批評的に物を考え、見、書くという  
ような方達だったものですから、今日は教え子の皆さんに、南吉先生の素顔を話して頂きたい、  
と思っております。皆さんが小学校を卒業して、安城高等女学校に入学されたのが、満でい  
えば12歳ですね。そして、南吉先生はその時、年齢は25歳ということになります。若い青年  
教師としてみえて、この12歳の少女たちの担任を、4年間なさったわけですね。

とにかく、いま皆さんがお考えになると、判ると思うのですけれども、一人の教師で、4  
年間担任をして頂く機会というものが今日ではないですね。ところが、大変すぐれた才能  
を持った先生に教わった方達なんです。実は、今日来て頂くにも、南吉先生のことは  
自分の胸の中にそっとしておきたいという、お気持ちが大変に強いように感じました  
けれども、折角こういう講座を開いていますので是非、ということでご足労を願った  
と、ということでございます。

さきほどもご紹介がございましたが、安城在住の加藤さんが、たいへん骨を折って  
下さいましたので、今日ご出席の皆さんのご紹介をです、加藤さんの方からして  
頂くことにいたします。よろしく申し上げます。

## －出席者紹介－

**加藤** それでは、私から左に、席順に、紹介させていただきます。私の隣にいら  
っしゃるのが尾藤さちさん旧姓杉浦さん。尾藤さんは全学年を通じて品行方正、  
成績優秀、常に、クラスの優等生でいらっしゃいました。人柄は優しく、謙  
虚で、いつもにこにこして、クラス全員の尊敬のまともいらっしゃいま  
した。おそらく誰も、その当時尾藤さんを追い越して一番になろうとは考  
えなかったのではないかと思います。そういう点で、新美先生に最も信望の  
厚かった生徒であられました。先生の亡くなられた直後、半田に嫁がれま  
して、そこでもまた、クラスの者に代わって先生のお墓の守りをして頂  
くような立場にたたれ、私ども、心づよく思っております。

次は、竹内孝子さん。旧姓佐治さんとおっしゃいます。竹内さんは、南吉  
の日記の中にしばしば出て参りますところの、佐治校長先生のお嬢さん  
でいらっしゃいます。新美先生は、この佐

治先生のご尽力で安城高等女学校に就職されまして、「やっと不遇な時代から解放され、生活の場を持つことができた」と、押さえ切れない喜びを書き残していらっしゃる。竹内さんは、転校生で、知性豊か、特に情緒の面では、当時の私どもよりずっと大人でいらして、幼いクラスのムードを引き上げて下さったものです。新美先生と、しゃれた会話のできた方ではなかったでしょうか。

次は、清彰子さん。旧姓中川さんとおっしゃいます。清さんも、やはり転校生でいらっしゃいますが、竹内さんと同様にクラスのムードづくりに一段と花をそえられました。当時から、読書好きで、清さんの都会的な雰囲気と文学性は、新美先生の教師生活に、期待と励みをもたらされたのではなかったかと思っております。

そして、鈴木秀子さん、旧姓木村さんとおっしゃいます。鈴木さんは、私ども田舎育ちののんびりした生徒とはちがいで、外地にお生まれになり、大陸育ちのそのままに、早くからはっきりと、自己主張のおできになる生徒でいらっしゃいました。新美先生とは、家庭事情を通じて、個人的にかなりお世話になり、ご迷惑をおかけしましたと、述べていらっしゃいます。今日はその辺の思い出話を、つまり新美先生が生徒の家庭のむずかしい問題に対して、どのように対処なさったか—そして、子供心にそれがどのように感じ、影響されたか—などを語って下さることと思います。

次は、本城良子さん、本城さんは生粋の安城っ子でいらっしゃいます。恵まれた家庭と健康な身体、頭のいい子、およそ、子どもにとって、それは最も幸せな条件です。その中でこのびのびと、明るく勉強していらっしゃいました。今は、中学校の教師をしていらっしゃいまして、今日はその立場から過去を振り返って語って下さることと思います。

最後に、馬場貞さん、旧姓後藤さんとおっしゃいます。今日、この会場のうしろに展示させて頂きました詩集とか色紙など、女学校当時の思い出の品の数々を、卒業以来ずっと35年間も大切に保存され、南吉研究家や愛好家のためにも、貴重な資料として役立たせてこられました。これらの資料が残っていたということは、同級生でさえも驚いております。「一体あなたはどのようなお気持ちから、これらのような品を大事にしまっておられたのでしょうか」やぼな質問をいたしましたら「私は、女学校の4年間で本当に楽しかったから。また、作文が大好きだったから作文を通して新美先生のイメージがとても強かったから。それは、多分、私の作文にいつもいい点をくださったからではないでしょうか」と笑って答えられました。おそらく、馬場さんは、生活に疲れた時、それらの品をそっと覗いて見ることで、なぐさめていらしたのではないかと思っております。

おわりに、私に加藤、旧姓山口と申します。平凡な一生徒でありました。ただ、新美先生の影響で、本を読む楽しさを覚え、安城で先生がご鼻根だった、この本屋(日新堂)に嫁ぎまして、今は、先生の本(著作)を売らせていただく立場に相成りました。不思議なご縁だとしみじみ感じております。以上で、紹介を終わらせて頂きます。

**神谷** 大変、加藤さんが文学的な紹介をして下さいまして、司会はいらなくなったような感じがす。(笑) 私、今、お話を聞いていながら、この間も加藤さんとお話をしたのですが、教え子の皆さんの人数は、54人だそうですね。南吉先生に担任を受けられた方が、一年の時は、写真で見ますと、52人のようですけれども、卒業される時には、出入りもあったんでしょー 54人だそうで。で、いずれもそれぞれ個性があつて、大変才能に恵まれた女性達だったそうです。私はそれを聞きながら、もし、南吉先生が男子の学校に勤められたら、どうだったろうかな、という欲目を感じたわけですが、女性であっても、童話作家の方がみえるほどです。(故山本知都子) 先だってお話を聞きましたら、大府から市議会議員に出てみえる方もおありになるようです。やはり、先生から教わった4年間というものは、この方々の一生を貫いたような感じを受けたのであります。先生は東京外語を出られましたけれども、自分の目的とする就職ができなくて、一時、東京で就職をされていて、病気になられて半田へ帰られます。ところが、病気だものですから、職がなくて、代用教員をされたり、近くの商事会社に勤めたりされて、精神的にも、肉体的にも、大変不安定な、生活をされていました。やっと佐治先生のご紹介で、安城の高等女学校の教員としてお見えになったわけです。それと同時に、今日ここにいらしている皆さんが、入学試験を突破して一年生として入学してきた。そして担任されることになるわけですね。大変先生も張り切っていて、もう、晴れ晴れとした気持ちで、赴任されたと思うのですけれども、その辺りのですね、先生と出会った印象とか、といったようなお話を少し聞こうと思うのですけれども。本城さんからちょっと言っ頂きたいと思います。

### — 新美先生の印象 —

**本城** あの、先生の印象でございますか？

**神谷** ええ、そうです。

**本城** 私、先生の印象は、大変申し訳ないんですけど、新しい学校に入学致しまして、見るもの、聞くものが、みんな新しい中での、新美先生の印象ということですので、今考えますと非常に焦点がぼやけています。ここに頂いたメモを見ても「具体的に容貌などについて」と、記してございますが、私の頭にありますことは、私は背が高くて、一番前におりました。で、よく先生の後ろについて、歩いたものです。運動場を歩いたり、あるいは遠足に行ったりした時などですね。そんな時に、目に映る先生の髪の毛が非常に黒くて、艶やかできれいだった。特に襟足がきれいだったものですから、綺麗だなあ、どうしてあんなに、つやつやしているのかなあ、といつも思って見ておりました。そんなところでございます。



**神谷** 少女らしい見方をしていますね。どなたか他に。尾藤さんは？

**尾藤** 私は、その当時、第三小学校といひまして、ここから約4キロ南にあります福釜という村から、たった3人のお友だちと来たわけです。そういう点、こちらにいらっしゃる加藤さんや、本城さん方は、町の中の小学校から来られましたので、お友だちもいっぱいいらした。私は、大変、心細い気持ちでおりました時に、先生のご紹介があったわけですが、何となく、小学校の先生と、女学校の先生とは、こういう風に違うものかなあ、というのが第一印象でした。特別変わっていらっしゃるのか、そういう印象は、あまり持たなかったわけです。まあ、その点、清さんたちのように、転校していらした方は前の学校の先生と比較されて、いろいろ変わったところをお気づきだと思いますので、その辺のところをどうぞ。

**清** 私、転校して参りまして、まず転校手続きをいたしました。その時、先生のお書きになる手が、目にとまりました。普通、男の人の手というのは、頑丈で、逞しい手でございますが、先生は、白くて美しい、細い透き通るような手をしていらっしゃいました。女性には、白魚の手とか、いろいろ表現がございますが、男性がこんな美しい手をしていらっしゃるということで、今から思えば、少女らしい感傷なんですけれど、そういう先生のまず、手の美しさにひかれましたね。それでするので、よく授業中も先生のお講義よりも、黒板にお書きになる先生の手の動きなどを、自分ながら、いつも見とれていたような気がいたします。(笑)

**神谷** 先生はやせてらしたんですか。

**清** 私も、通学路を歩いていかれる姿を、見たことがあります。女学生達よりも一段と背が 高く感じたことがあるんですけどね。

**尾藤** 歩き方に、特徴があつて右か左、どちらかの肩を上げて歩いてゆかれましたよね。

**本城** おやせになっていたということで、私も、ちょっと聞いたことがあります、あまりやせていらっしゃるから、それがいやだから、お腹に白いさらしの布を、どれだけやら巻いていらっしゃる。なんてことを……。ですから、ご自分では、やせているということに対して……。私たちは、羨ましかったんですけれど、先生自信は、とても気にしていらっしゃったと思います。

**清** それから、その当時、新田に下宿してらしたから、と思いますが、よく先生は、夜お散歩をなさったんですね。ある時、偶然、私はそれをよそながら拝見をしました。その時は、先生の透き通るような肌の白さと、月夜の晩になると、先生がよくお散歩なさっていることが、何かこう、非常に強烈な印象として残っています。本城さんたちと、よく夜散歩したことがありますよね。

**本城** そうですね。お互い、家が近くだったものですから。

**清** ですから、おそらく先生は、その時に、思索でもして、話の筋でも練っていたのかな、と今思います。

**神谷** そういう、皆様がたの先生に対する、思いというのですか。今、お話下さったことが何かこう、頭の中に出てくるような気がしますね。先生は、始めの一年位は、半田からお通いのようでした。そして、二年目位から、安城の新田の方へ下宿をなさったようです。その下宿をなすつても、土曜日には半田へ帰られて、月曜日に、またみえるというような暮らしでした。それから、創作をされる時には、やはり下宿の方で、というようなかたちで。どうも食事は駅前の川本という（今はお料理屋さんになっていますけれども、前は食堂でした）店で、その店のものを取ってみえたようです。皆さんが南吉先生の詩などを読んで下さると、新田あたりの風景というか、風物、女学校あたりの風景などが、よくうたわれているようですけれども、今、月夜の晩に散歩された、ということ何か符丁があっているようなと、私は感じを持ってるわけなんです。

### 一詩・作文の指導一

**神谷** それとともに、教え子の皆さんにもお聞きしますと、週に一時間作文の時間があつたんだそうですね。国語の時間は、何時間あつたのか、聞き漏らしましたけれども、当時は、ほとんど課題が出されて、作文を書けというような指導が、国語や作文の指導の普通のスタイルなんですよね。ところが南吉先生は、はじめから自由題で、詩や、作文を書かせられた。で、今、皆さんのお手元にお渡し致しましたのは、馬場さんが、持ってみえる物の複写でありますけれども、これは先生が、自らガリ版に書かれた文字でありますね。こういうものが、六冊、これは一年生の第一詩集ですから、第六詩集までであるということなんです。こうして、丹念に一冊一冊出されて、生徒に渡されたということです。その頃の、詩や作文の指導についてですが、今日尾藤さんが提出され会場に展示されている作文帳、それを見ますと誤字とか、脱字などが、赤ペンで丁寧に添削されていますね。そういった詩や作文の指導のことに、少しお話をうかがいたいと思います。



**尾藤** 今は、国語の中で作文が、どんな比重を占めて、指導されているか知りませんが、その当時は、とにかく、一週間に一度は作文の時間がありまして、それで、課題の出る時もあったわけですね。ですから生徒は、一週間位前から、いろいろ書くことをまとめまして、一時間かかって書き、作品を出しまして、その次の作文の時間に先生からいろいろご批評を聞くというようなことでした。一つの作文について、二時間位かかったんじゃないかな、と思います。今、神谷先生がおっしゃいました、その当時の作文帳というのが、あの、たいした物は残っていませんのですけれど、

これだけ、手許に在り、今日ここへ持ってきたわけです。昨日も、ちょっとそれを操ってみましたら、一年から二年までの間に、四十篇ぐらいの作品を書いています。

はじめは、非常に幼稚なものから始まりまして、一年生の当時は叙事文を主に、ご指導頂いたんじゃないかな、と思いますけれども、上級生になってから叙情文の世界も、だんだんご指導頂いたんだな、ということが、今、判るわけでございます。その作文の他に、詩の指導を六回ほどして頂いていまして、今お手許に届いております、詩集の詩は、むしろ正課の授業じゃなくて、自由に書いてきましたものを、提出したものです。ですから、全員の方が出したということじゃなくて、参加も自由だった、そのように記憶しています。とにかく、作文帳から考えまして、詩は、六回位ご指導を頂いたようでございます。それから、短歌が二回位ありまして、その他に特殊な指導だと思えますけれども、志賀直哉の「或る朝」という小説だと思えますが、九枚位の原稿用紙にわたって、全員の方が先生がいちいち黒板にかかれるのを、一生懸命で写したりしました。島崎藤村のものや、他の作家のものを読んだり、高学年になって最後の方では、自分が読んだ作品の概要を書いて出すというような、課題もありました。それから、毎日、日記を書かされましたね。

**神谷** 大変、こう物をよく見てますね。物をよく見て、そして、自分の心に感じたこと、思ったことを素直に表現するという、まあ、詩の一番元になること、そういったような指導をなすったから、こういう立派な作品が（生徒詩集など）できたんじゃないかと思う。それから、のちに世に出た南吉先生の見聞録という、一応日記なんでしょうけれども、その中のはじめの頃には、教え子の皆さんの日記が、随分抜粋されているんですね、で、興味を感じたものは、丁寧に見聞録の方へ写し採られている。そのことがまた、先生の作品の中に何か生きているというようなことも感じられるわけですが、そういった作文帳とか、今、さっと拝見しますと、点数が書いてありますね、AとかA'とか、あれは、しょっちゅうあんな風ですか。

**尾藤** 変わっていますね、あ、い、う、とか、しまい頃は、○を重ねて書いてありましたし、何か点数の表現がしょっちゅう変わっていますね。

**神谷** その時、その時に変わるわけですね。そして、随分よく添削して下さるんですね。誤字などは、もう必ず直してありますし。

**本城** 添削のことでは、ちょっと思い出したのですが、「僕は、学校で仕事が忙しい方だ」とおっしゃいまして、「第一、作文を受け持っているということは、五十人の作文を全部一週間で見なければならぬ。凄い労力だ」と、言われたことがあります。

**神谷** そういうようにして、皆さんは先生から詩や日記や作文の指導をうけられたわけで、その学校で四年間、繰り上がって来たということですね。今日では、好きな先生なら一年位は続けて下さるが、翌年になって担任が変わると、もう途切れてしまうということで、指導に一貫性がない。ところが皆さんは、とにかく、そうした指導を、四年間積み上げて来られた。と、ということが、お話

を聞いていまして大変、表現力があるということにつながるような気がします。

## 一劇について

**神谷** その表現の一つとして、全集の中に劇が五編のっているのですが。お聞きいたしますと予餞会とか、学芸会みたいのがあったんですか。

**尾藤** 予餞会、そして学芸会もありました。

**神谷** そういう折に、先生が脚本を書かれて、そして、それぞれ配役を決めて、指導をなすったわけですね。そのあたりのことが、今までほとんど皆さんも何か その、記憶が遠くなってしまってみえて、お話しをして頂かなかったから、何かはっきりしないで、残っているという感じがしています。劇の指導を受けた予餞会があったようですけれども、南吉先生の日記の中にも、大変面白く、「あれは駄目だ」なんて書いてあったり、「あれは案外、思いがけず役者だ」とか、大変愉快的な記録が残っていますけれども、そのあたりのことを、記憶にある方でお話しをして頂きたい。尾藤さん、本城さんはいろいろやられたとか。

**加藤** 何かどうも、この劇あたりの、記憶が薄れて、本当にお恥ずかしいんですけど、あの「ガア子の卒業祝賀会」には、尾藤さんも、本城さんも、主役で出ていらっしゃるはずなのに、ご本人が定かではないとおっしゃって…(笑)

**尾藤** 申し訳ない。せりふが出てくるかなと…

**神谷** ちょっと、どんな劇をやったかということだけでも。

**本城** 「ガア子の卒業祝賀会」以外では「千鳥」「ランプの夜」などでしょうか。

**尾藤** その他に、まだ、誕生会〔註 全学年をとおして、誕生月の同じ生徒(先生方も)が集まって、茶話会をした〕というのがありました。「今月の誕生生徒は何人です」と、先生に申し上げておくと、その人数に合わせて、脚本を書いて頂けて、それは、まあ全部の人じゃなかったわけですが、学年中を通じての誕生会でしたから、そういう発表の場所もあったんだと思いますが。違いますか、皆さん…。それらは、南吉先生の作品としては残っていないかもしれませんが、みんな何かやった記憶があるんじゃないか、と思います。わたしは「ガア子の卒業祝賀会」では、父親の役をさせて頂いているようですけど。

**本城** 私も「犬」の役だったことだけは覚えています。あのそれだけのことで。(笑)



**神谷** 割合、いいと書いてありますよ。日記に。(笑)

**本城** 今でも、ちょっと「犬」のようなところがありまして、そういう単純なところがありました。(笑)

## — 国語・英語の指導 —

**神谷** それでは、これはこの位にして、国語の指導に相当力をいれてなすったと思うのですけれども。鈴木さんは、どうですか、そのあたりのことは。

**鈴木** そうですね。国語の指導と言いましても、あまりはっきりとした記憶はないのですけれど、授業が終わりますと、必ずちゃんと生徒に質問させるというような授業の仕方だったと思います。それから、本をきちっと読む、というような指導をなさっていたというような記憶がございます。

**神谷** 清さんいかがですか。

**清** 私、授業に記憶が、そんな風で、あんまり手の美しさに見とれておりました(爆笑)

**神谷** やはり、今時のように、あんまり書き取り、書き取りなんてことはやらなかったようですね。

**尾藤** 結構、勉強したんじゃないですか。

**加藤** 書き取りは学校全体の、まあ校風みたいな行事でして。全学年、たとえば、一年生から最高学年まで、ハンディなしに、書き取り競争というのがございましてね。そして、十人位でしたか、成績の良いのが廊下に張られたりした。そんな風に至極熱心でした。

**神谷** 英語あたりはどうでしたか。これが先生のご専門なんですから。

**本城** 私たちが勉強しておりました英語っていうのは、今の生徒が勉強しております語を考えますと、大分、簡単だったと思います。リーダーの本文を訳して、単語の意味を覚えそして、順番に声を出して読まされる、そのような感じでした。

**神谷** 加藤さん、この間ちょっと聞いた、あれ、面白いと思うのですが。

**加藤** はい。先生の英語は、体から教えこむ 一生徒としましては皮膚で感じる— と、というような指導の機会に接するということが多かった、と思いますけど。たとえば、低学年一年生の頃は、よく、お天気の日、外に出ようとおっしゃって、校舎の外を歩きながら手に触れるものとか、目につくもの、そういうものをすぐ単語で記憶させるように、空はスカイとか、青はブルーだとか、木

はツリーだとか、そんな風に、即座にその場で生徒に教えて下さいました。そういったことで、身近に入っていったと思います。それから、二、三年生になりますと、それに動詞が加わりまして、たとえば授業のために教室に入っていらっしゃいまして、腰をかけなさい、というのは、シット・ダウンとか、窓を開けなさいはオープン・ザ・ドアとかいう風に、ちょっと、動詞が入りまして、入りやすい授業でありました。励みをつけるために、これは馬場さんからお聞きしたことですけれども、よくできた生徒には、ちょっとしたご褒美を。ちいちゃなポケット英和辞典ですか、そういったものを二、三人の生徒に与えられまして、励まされたということもございましたようです。

**神谷** 大変、面白いですね。今日まで身についてみえるんですからね。英語が。(笑)

**加藤** この辺、英語の授業のことで、竹内さん何か。

**竹内** 私は、お話にあったような教え方は、実は教わっていないわけで。というのは私の父が(佐治校長)安城高女の校長をしている間は、私どもは父の考えで子どもたちは別の学校に、先生方がご迷惑だろうということで、通わされておりました。ですから私事なんですけれども、始めの二年、三年の途中まで刈谷の女学校に入っておりまして、三年の途中で、父が刈谷の女学校の方へ転勤しましたので、それで私たち姉妹が安城高等女学校へ入ったーという次第だったものですから、今、お話しにあったような、懐かしい思い出はないわけですが、英語そのものは、教科書にしたがって、きちっとやっていたら風でした。

いま印象に残っておりますのは、割合、英語の時間の間に、ちょっとおっしゃったお話しなんか、十五やそこらの子どもの田舎の女学生におっしゃるには高度な、芸術的な雰囲気のあることを、ちょくちょくと、おっしゃったのが、頭に入っております。英語の教科書の中に、オスカーワイルドの「幸福の王子」がありまして、その時ワイルドの思想について触れられ、黒板に「芸術至上主義」とか「自然が(自然は だったかも知れませんが)芸術を模倣する」とかを、書かれたと思います。こんなにありありと覚えているのは、始めて聞いた言葉であり、大変な好奇心を持っていたからだと思います。転校して来て間がない時期だったのかしら。それから、私の転校生としての率直な感じで言えば、先生の英語は、ちょっと、ごつごつした感じで、流暢とは言えないものだったように覚えています。ペラペラとやる風な、派手な英語ではなかったような気がしています。

**神谷** なるほど。先生は大変、花が好きのようでしたね。皆さんが頂いた手紙とか、色紙とか短冊とか、随分、花の名前が、それから作品の中でも、それも道端にちょっと何気なく見かける花。そういうものを随分よく知ってみえて、それを作品の中に書かれている。学校の花壇あたりの仕事なども、おそらく皆さんと一緒にやりになったり、ちょうど、戦争中ですから、勤労奉仕に慣れぬ稲刈や田植え等にも出掛けていかれる、まあ、そんなような学校生活を送られたわけですが、いろいろお話を聞いてみますと、大変、生徒の細かい家庭のこととか、その生徒の心の動きとかいうか、気持ちというものを、正確に丹念に捉えて、ご自身の見聞録の中にも書いて

みえますね。そして、私どもが読んでみても、なるほど、的確な判断をして指導してみえる、ということが随所にあるわけなんです。

それ程、何といいますか、皆さん一人一人が、おそらく、先生に愛されているとか、先生に愛されたいという、お気持ちを持っていましたろうし、その反面、愛されていないということの、裏返しとして、憎しみを抱くということも、長い年月の間にはあったらと思うんですね。そういうことが、何かこう誤解されて、評論家あたりの手になると、裏返しの論理で世に紹介されたりする。と、これはまあ、受講者の皆さんは現在、お聞きになって充分お判りになったと思うんですけども、裏返しの論理は、いくらでもできるわけです。しかし、人間の生き方というものは、やはり、裏だけみただって、本当の生き方ではない—というようなこともあって、それで「先生と私」というような、四年間担任をして頂いて、今一番、心に残っていること、このことは、先生のお言葉として大変なつかしいとか、いつまでも消えないものであるとか、そんなようなことを今から、お聞きしようと思いません。鈴木さんいかがですか。

### 一心に残る思い出

**鈴木** 私個人的なことなんですけれど、私も実は両親が離婚いたしまして、継母が来まして、家庭が常にうまくいっていませんでした。私は、大変気が強くて生意気な女学生で、常に親に反抗いたしましたので、もう いつも、ごたごたいたしておりました。さっき、どなたかが話されましたように、当時、生徒に先生は日記を書かせていらして、それを一週間に一度ずつ提出させて、丹念にそれを読んで下さいまして、いつも、赤インクでいろいろと先生の感想を書いて下さいました。あの、それで直接会って、先生とお話したこともありますけれど、日記というものは先生にとって、すごく大変だったと思います。全部の生徒のをご覧になるんですからね、そして、それにちゃんと赤インクで、先生のお気持ちだとか、いろいろとお書きくださるんです。

あの、それすごく先生との心の交流に役立ったんじゃないかと思います。それから、別れた母が時々手紙を学校あてに寄越しまして、一度、実は、母は英文が割にできたものですから、英語の手紙を寄越しました。その時、私は先生の日記にもちょっと書いてありましたが、全く勉強を放棄いたしておまして、勉強する気なんか全くなかったわけなんです。母からの手紙は、始めのうちは家の方へ回送していたらしいんですけど。その事で、先生が私を呼ばれまして「君が、あの回送していたのを見ちゃって。日記に大へん激しい言葉を書いていたので、これからは、君に見せてから回送するから、変な気持ちを起こすんじゃないよ」って言って読まれて、それで、あの、その手紙を渡してくれました。ですけど、英語がよく判らないものですから、先生に訳して下さいと申しましたら、「自分で判るところだけ、訳して来なさい」とおっしゃいましたので、じぶんで判るところだけ訳して、便箋に書きまして持って行きました。そしたら、先生がちゃんと細かく訳して下さいました。そういうことが、今だに心に残って教えられました。ですから、私は母を思います時、すぐに新見先生を思い出します。そして、先生を思い出すと、すぐに母を思い出すと、という毎日でございます。まあ、いろいろあるんですけど結局、私の家庭とか、個人的なこと

などの思い出が随分あります。それで、先生は外見冷たいような、神経質そうな先生だったんですけど、ほんとと心の中はとても温かで、人情味あふれる先生じゃなかったかな、と。その当時は、ただ反抗しておりましたけれど、今になって沁々とそう思い出されます。

**神谷** 大変何かこう、生徒が病気をした時にお見舞いに行った話とかを読んでも、思いやりが随分あって、身体の弱い子とか、失礼だけど、鈴木さんのような方だとか、そういった生徒に対して、とても思いやりがあったようですね。そして日記にも書かれた、「こういう風にしたんだ」というのを読みますと、すばらしい指導だと思いますよ。なかなか今の教師であれだけのことを考えてやれる教師があるのか、という気持ちを抱かせるものがありますね。子どもの心をしっかり捉えてみえるというものを感じますね。他には？

**加藤** 本城さん、今、教師の立場からいかがでしょうか。

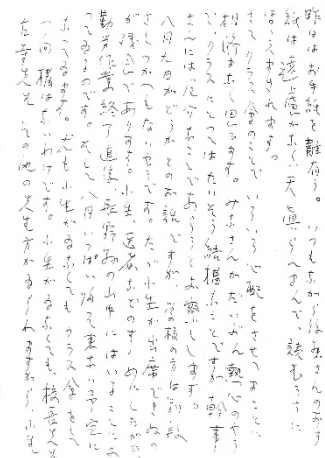
**本城** 私が教員ですからね。きっと、教師の立場から――と聞かれるのではないかと、実は昨日から思いまして、一生懸命考えておりました。今日も授業時間がいっぱいつまっていたのですが、その授業の間にも考えていたようなわけでして。(笑) 振り返って、先生が教師であられた当時は、私は反対の立場。その頃、教師としての先生がどんな風だったか――ということは、ちょっとピンとこないのです。けれども、今日この会場へ来る電車の中で、そういえば――という気持ちを集中して、他の先生方と比べたりして、思い出してみますと、やはり先生と生徒の間柄の、ちょっとした触れ合いとかが、しっかり鮮明に残っているんですね。その鮮明さ――というのは、先生が私たちの心の奥深くまで見通していられて、適切な指導を常にしていて下さっていたから、という証拠ではないか、という思いがいたします。

そう考えますと懐かしさはひとしおよみがえって参ります。で、時々、かつて先生が私たちになさったことを思い出して、真似をすることがあります。というのは、学活（学級で自由に使える時間）の時に、ふと、たしか丁度今頃（中三）『大人になる』という題で作文を書かされたことがあったな、と思い出して『大人になる』という作文を書きなさいといいましたら、今の生徒は、非常にいろんな角度からとりまして、私が新美先生から受けた時の、その気持ちとちがって、ほんとにあきれるような感覚から、その大人になる――というものを捉えて書いています。そういうこととか、先生が生徒に何らかの連絡をとられる時の方法――これがなかなかおもしろかったですね。当時、女学校では教科によって、その都度移動しまして、ホームルームに戻った時など、黒板の右端下に先生の誌的な字で、“誰々用あり”という風に簡単に書いてあるんです。そうして呼ばれた生徒は、職員室に行くわけですが、大抵半分はお叱り、半分くらいは他の用事でもあったわけです。“用あり”と書かれた生徒は勿論のこと、他の生徒もみな、何の用かしら、何のお叱りかしら、と大いに内心やきもきしたものでして、お互い、その心境の探り合いもおもしろかったのので、私は今、その先生のやり方を真似させて頂いています。(笑)

**神谷** 今の生徒は、担任の先生の名前を言ってごらんなさい—と言われても言えないのです。それ程、教師自身の個性がなくなったのかな、ということも感じますしね。それともう一つは、子どもと先生の結び付きというものが、薄くなったのかな、ということも感じられます。そういうことを思うと、やはり、自分の教え子に、一生心に残る何ものかを。それはもう一人一人違うと思います。何ものかを残されたということが、やはり私は偉大な教師だった、と言っていいんじゃないかというように思うわけです。昭和十七年三月に卒業ですね。皆さんは。それから、担任されなかったようですね。昭和十八年の二月、退職されて、三月に亡くなられたのですね。

十七年の八月あたりに、同級会開催の計画をされたりした時、この私の隣の馬場さんが、計画されて、先生にこういうことをやります、と言う時、この手紙（『安城の新見南吉』p22）を頂いたわけですね。

今、皆さんのお手許へ差し上げた手紙、これを読んで頂くと、よく判りますけれども、実に懇切丁寧にどういうことをしなさい、と指導しています。今の先生方の悪口を言って悪いんですけど、今では「おうやるか」(笑)と、いう位で残念ながら、誰がこれだけの指示をして頂きますかね。ほんとに、恐らくまあ、先程、加藤さんが、馬場さんは、なぜ、この先生のこういうものを大事にしてみえるかということ。この手紙を読めば判りますよね。大事にしたいですよ。これを読んでみますと、まだ皆さん読んで見えないでしょうけど、一度ゆっくりお帰りになって読んで頂きたいと思います。こういう繋がりが、やはり教師と生徒の本当の繋がりですよね。そういうものが、もう一度こなければならぬ、そういった社会にしなければならぬと思うんです。とにかく卒業して三十年もたったわけですが、こうしたことにおいても繋がっているということは、なんとも羨ましいことだと思います。先生がご病気になって、学校へ来られなくなったのがいつ頃かということが、ちょっと私には判らないのですが、とにかく、十七年の今ごろからでしょうね。皆さんが、お見舞いに行かれるということがあったわけですが、そのあたりのこと、それから同級会の催しなどをお話し頂きたいと思います。



## 一 病氣見舞、お別れなど一

**本城** 実は亡くなられる一ヶ月位前のことですが、尾藤さんからお見舞いに行かないかという話があったのです。私は、新美先生に対してお見舞いに行くという、温かい結びつきのある生徒ではないと思っていたのですが、お慕いはしているのですが、自分からという生徒ではなかったのです。尾藤さんから声を掛けて頂いて、それと大村さんという、もう一人の友達と三人で、岩滑の、先生が寝ていらっしゃる家“はなれの家”へ行ったのです。最初はお店の方へ行き、そこから案内されて二百メートル位離れたお家の部屋へ行き、先生の枕元に座ったのです。

その時、思いましたことは、廻り三方に高い天井まで本箱があって、その真ん中に先生が寝ていらっしやいましたので、「先生、地震があったら、本に埋まってしまうわね」と、申しましたら、「本に埋まって死ねたら、僕は本望だ」と、言うておられました。それからどういうわけか、気持ちの中にいつまでも消えないことは、その三人が座っている時に、母屋(南吉の生家)の方へ使いに行ってくれと、頼まれました。そこで、三人のうちで、私達二人が立ちあがりますと、先生は「二人はのこりなさい」と、おっしゃった。その言葉が、いつまでも忘れられない言葉になりました。そして、私が聞いた、先生の最後の言葉でございます。

**尾藤** その頃、かなり戦争がきびしくなってきたりまして、女学校を卒業した私、本城さん、大村さん三人は教員養成所(のちの青年師範)へすすみ、当時、女学校の北側にあった寄宿舎に、団体教育とかで半年ほど入れられました。女学校に近い距離におりましたので、先生の病気が悪くなったという情報が入りまして、それで三人でお見舞いに行ったわけです。また、その頃の社会情勢というのは、みんなお若い方が多いので、どうかと思いますが、私どもはその寄宿舎に入って勉強していたというのではなく、勤労奉仕で、依佐美の無線の鉄塔あたりの田圃に、暗渠排水工事のために、地下足袋をはいて、掘割りみたいな溝を掘ってそだ木をつめていく、そういう仕事の手伝いをする毎日でした。そうした忙しい時でしたので、岩滑へお見舞いに行く、一日の休みが取れない大変な頃でした。また、お見舞いにもっていく品物とて無い頃でした。私が田舎出でしたものですから、卵や、兄が調達してくれた栄養スープなどを持ってうかがいました。量を増やすために、ご飯つぶの中にあずきがいっぱい入った本城さんのお弁当。ご飯つぶよりじゃが芋の方が多い大村さんのお弁当。私は少しばかり恵まれていて麦の入ったお弁当。これが当時の食料事情でした。

お昼にお店から(南吉生家)白菜と卵の入ったおすましがとどけられ、日向でお食事をして帰りました。病室で、その時言われた先生の言葉の一つ一つが最後の言葉で、胸にくすぐるように、忘れられません、三十年たった今でも。具体的に覚えていることを少しお話してみます。当時、学生の青春ものを書いて有名になった石坂洋次郎の『若い人』という本がよく読まれていて、そのあたりのことも頭にあられたのか、「君たちとの生活について書きたかったのだが、書く時間がなくて、残念だ」と言われました。そして、その後、先生の日記などが手元にきて、読んでみますと、生徒のこと、女学校での生活のことなどいろいろ書きとめてあって、いつかこれを作品に書こうとしていらしたのだな、と思いました。

それから、もう一つ。その日のお見舞いに、と栄養スープ、実はすっぽんのスープを持参しました。先生に「母からです」と申し上げたら、それならーと、私の手からまるで奪うようにして、一気に飲み干され、むせかえり、お苦しそうで三人ともおろおろしていました。やっと落ち着かれ「東京の精養軒でもスープを飲んだけど、こんなスープははじめてだ」とおっしゃいました。私は何かこう、先生の生きることへの執着みたいなものを感じ、胸がいっぱいになったものです。家に帰り、母に聞きましたら、そのスープは薄めて飲まなければいけなかったそうです。

**本城** もう、その頃は、先生は声も出ないような状態でしたが、お母さんから「先生が お医者さ

んにかからないから、お医者さんにかかるように言ってほしい」と言われました。「お医者さんにもかからずに亡くなってしまったと言われると困りますから」とも言われました。

**神谷** そのような、ご病気だったようです。みなさんが、年表を見て頂くと判りますが、亡くなる少し前に、女学校を退職— となっております。そして、お聞きしますと、職員室の机は三月の末まで、そのまま置いてあったということです。私も、どういうわけで、亡くなる前、病氣中に退職なかと不思議に思いましたが、当時の法律で、三ヶ月くらい病氣欠席すると、自動的に退職というきまりがあったのかと思います。そう思いながらも、まだ調べていないのですが、学校としては、先生の机をそのまま、三月までのこして、皆さんが片付けに行かれたということです。卒業された年、昭和十七年に一度同級会をされていますね。

**尾藤** それはやってるはずですね。

**馬場** そのことなんですけどちょっと。実は、在学中から新美先生に「第一回のクラス会の幹事は、後藤、きみがやりなさい。副幹事は、君の好きな人を選んでよろしい」そう言い付けられてまして、私は 責任感やら、先生の私への信頼みたいなものに恐縮するやらでびっくりしました。それで、はりきって、第一回のクラス会を八月に、と計画したのですが、新美先生は八月は出られない、と聞きまして立場上とても困ってしまい、「担任として出て頂けないないということでは、同級会を開く意味がなくなります」という抗議の手紙を、直接、半田のおうちへ出しました。

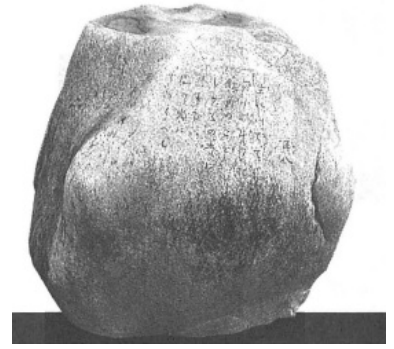
今、思いますと、その頃先生は『都築弥厚伝』の執筆のため、長野へ出かけられたようですから、日程が、都合つかなかったんだと思います。ご病気のため、その長野からも、直きお帰りになったらしく、知らなかったとは言え、失礼なお手紙を差し上げ、申し訳ない気持ちでいっぱいです。話は前後しますが、その長野ゆきの前に、今日、うしろに展示しましたお手紙を、同僚の戸田先生に託されて、届けて頂きました。

**神谷** 結局、先生を迎えてのクラス会はできなかったということですね。

**馬場** はい。それで十月に第一回を致しました。新美先生はやはりご病気で見えませんでした。余談ですが、お茶菓子のおまんじゅう一つ用意するにも、お友だちに頼み、農協でお願いするやら大変苦労致しました。それから、昭和二十二年二月五日に第二回のクラス会、結果的には“偲ぶ会”になりましたけど、致しました。もうその頃、記念碑建立の話がでていまして、その費用の一部にと、戸田先生から申し出があり、南吉原稿用紙を買いました。私も主人と相談し、五十円位ふんばつしたと思います。

**尾藤** その時に、碑の寄付金を募ったり、卒業写真（一枚だけ）を買ったりで、ちょうど新円の切り替えの時期で、みんな大変でしたね。

**神谷** そして、それが昭和二十三年十一月二十三日の“蝸牛詩碑建立”となるわけですね。佐治先生が持っておられた詩集の表紙に、『ででむし』の詩があって、これを石に刻んだのですね。今は、安城高校の中庭にある詩碑を、次の機会ですが、南吉文学散歩の時にごらん頂く予定にしております。何か、木曾川から出た石だそうで、花崗岩、御影石ですね。つくばいの形をしているもので、これが、いつできたか、いつの同窓会の時か、よくわからないのですが、そのあたりのことで何か、皆さんにご記憶も…三十年も前のことですから、なかなか思い出せないですね。しかし、その辺の記録が出て参りましてね。月日も判ってきたのです。



**尾藤** 碑の除幕式の時には、皆、子育てに忙しく、出産をひかえていた方々もあつたりして、あまり大勢教え子は出席できませんでしたね。竹内さん、あなたは二人目の赤ちゃんをおんぶして。

**竹内** そうですね。

**尾藤** その時に拓本を、習字の古寺先生が刷って下さって、みんなで分けましたですね。

**竹内** 私も持っております。今でも拓本はできるかもしれませんが、当時のものは趣きがございます。大切に、記念にと、とってあります。その時に出席した人たちは、全員一枚ずつ頂いて帰りました。

**神谷** そうですか。さあ、もう時間がきてしまいました。何か、まだ話足りないことがありましたら、よろしく願います。

**清** あのう、わたくし、先生が亡くなられてから先生のお店に、四、五人でうかがったことがあるんです。その時、店の男物の四、五歳の子どもが履くような下駄と、女もの下駄が二足だけ売ってありました。それで私は、この男物の下駄を買いましたの。主人の母に「子どもの下駄まで用意してきたお嫁さんだ」と言われました。(爆笑) やっぱ先生が忘れられなかったんですね。そういう昔の思い出がありますの。

**加藤** 馬場さん、いかがでしょうか、何か。

**馬場** 先生は英語ばかりでなく、いろいろな才能のある方だったですね。期末試験で数学の時間、監督につかれた時、終わりのベルが鳴る前にその問題を解かれて、すましていられたり、その他、絵もお上手でした。まあ、何と言っても私は自分が作文が好きで、そのことで先生にご指導うける折りがよくありましたので、なつかしいです。戦時下で、傷病兵の慰問の文を書いたり、



作文コンクールで賞をとった時など、ご自分のことのようによこんで下さったり、ほめて下さったり、で、随分励まされました。いくつになっても、ほめられたことは忘れられません。

**加藤** 最後に、尾藤さんから、新美先生の日記や、見聞録、ノート、の類をお預かりしたことについて。ちょっとお話下さい。

**尾藤** 先程、馬場さんも言われましたように、昭和二十二年二月五日に“新美先生を 偲ぶ会”を致しました。当時、私は青年師範の付属におりまして、大村さんと二人で、一生懸命に骨折って岩滑の方から、いろいろな資料を借りてきて、作法室を会場にして、遺品展をやりました。長机を向き合いに並べて、いっぱい展示するものがあつたのです。その資料をお返しに行った時、例の、日記の類いを「家においても風呂の焚き付けになってしまうから、よかつたら持って行ってくれ」とお父さんに言われて、本当にお父さんから私どもに託されたものです。

先生から直接頂いたものでもなく、依頼されて預けられたものでもなく、このような事情で、お父さんから預かつた、日記や、ノートや、備忘録です。それを読みまして、本当にびっくりしてしまいました。えらいものを貰ってしまった、と思い、佐治さんや加藤さんに相談しました。どうしたものだろう、どうしたものだろう、ということで、丁度、皆さんが結婚やら、出産の時期になってしまいましたので、それぞれが、気にしながらも手元に温めておつたわけです。

それが十七回忌のときに、(昭和三十四年三月二十二日)、東京から巽聖歌先生(南吉の文学を高く評価し、南吉を世に出した人)をお呼びして、岩滑で法要をしたその時に、安城に、こういう日記がある、ということをお報せしました。東京の方で、巽さんが、雑誌などで、教え子のところにも新しい資料がある、ということを発表されるようになりました。東京にいた清さんも、「教え子であるということ、言いそびれているけれど、何となく心苦しくなってきたから、日記の類いを何とかしなければ」ということでした。こちらの加藤さんにも、いろいろと心配を頂いたのですが、結局、私の方としては、具体的に発表する力もありませんでしたので、巽先生を通じて一と、ということになりました。私達も、最初に出た三巻の童話集はみんなで力合わせて売つたりしたものです。はい。

**加藤** このような経緯で、日記が発表され、世に出ました。そして、南吉全集が出版されるように進展していったということだと思います。もし、先生の日記の類いを私共が紛失したり、お風呂の焚き付けなどにしていたら、こういう全集は出版されなかつたかもしれない、などと、感慨ひとしおです。

**神谷** どうもありがとうございました。今日は、私一人でお聞きしてまいまして、大変恐縮してしまいました。もう時間も参りました。来て頂いた方も、まだ十分でなかつたか、と思いますが、今回がはじめてのことですので、今後も続けられればと思います。どうもありがとうございました。

(文責 加藤千津子)「安城の新美南吉」掲載